

論など)を抽出するために、異なる歴史の線上にある事象との比較が必要であると考えたのである。さらに、一つの現象の比較にとどまらず、時間における諸現象の連なりについても比較を行うことも主張されている。

社会的・政治的コンテクストへと目を向けると、ペッツォーニの「宗教的自由」運動に代表されるように、イタリアの宗教史学はカトリックのヘゲモニーへの対抗手段という側面を有していたということが明らかになる。デ・マルティーノやラッセル・ナリーが行った南イタリアにおけるフィールドワークの出発点にも、南部にみられる呪術的な諸事象がカトリック信仰と比べ劣ったものとされている状況への憂いがあったと捉えるべきであろう。

オットー宗教史学の方法論再考

澤井義次

ルードルフ・オットーはみずからの神学研究に比較宗教学的な視点を取り込み、宗教の進化図式を保持しながら、宗教の多元的発展の歴史という一つの宗教史の「語り」を提示した。今回の発表はR・オットーの宗教史に関する「語り」をめぐって、オットー宗教史学の方法論とその問題点を明らかにし、宗教史研究のあり方を再考しようとする宗教解釈学的な試みである。

オットーは異文化への旅をとおして他宗教との出会いを経験した。彼は世界の諸宗教伝統を射程に入れながら、キリスト教神学を熟考するルター派神学者、あるいは宗教学者であった。オットー宗教史学の構築にとって、彼の東洋への旅、とりわけインドへの旅は大変重要な契機となった。彼はキリスト教神学および宗教哲学の視点から、人間が本来的にもつ宗教の本質を省察すると同時に、比較宗教学的な視点から東洋の宗教史の中に、特にインドの宗教史の中にその具体的な宗教現象を探究する過程で、独自の方法的視座を構築していった。彼はキリスト教神学および宗教哲学の視座のうえに、宗教史学の視座を重ね合わせていった。彼は生涯を通じて、みずからをキリスト教的の神学者として意識していたが、彼の宗教史学はキリスト教的パースペクティヴによって再構成された、いわば宗教史の「語り」であった。

東洋の宗教の中でも、オットーはヒンドゥー教伝統に注目した。特にヴィシュヌ派の宗教伝統をインドの「恩寵の宗教」として捉えることによつて、彼はそれが西洋のキリスト教とパラレルをなすと解釈した。そうした宗教解釈学的な視座がその射程内に取り込むことができたのは、ラーマヌジャの思想やヴィシュヌ派の信仰現象によつて代表される、いわゆる「バクティの宗教」とその思想であった。そのことはオットーのインド宗教研究がキリスト教的な諸概念的枠組みに依拠しすぎたために、インドの宗教現象や宗教思想をその全体像の中で理解できなかったことを物語っている。

オットー宗教史学で用いられた宗教概念は、近代西洋の宗教

第1部会

的な意味を含意していた。宗教の諸概念やそれらによって構成される概念的枠組みは、不可避免的に歴史的・文化的な偏見をもっている。それはオットーの宗教史学にも顕著に見られる。西洋モデルの宗教概念を非西洋の宗教へと直接的に適用して説明される宗教史の記述は、どうしても歴史的・文化的な偏見を含まざるをえない。したがって今日、従来の宗教史学で自明視された諸概念や諸理論も、具体的な宗教的コンテキストへ引き戻して再検討することを迫られている。その意味では、オットーの東洋への旅は、近代西洋に成立した宗教の諸概念を東洋の宗教的コンテキストの中で再考するうえで、重要な契機となる可能性を秘めていた。しかし、彼はあくまでも近代西洋の宗教概念に依拠しながら、ヒンドゥー教伝統の諸相を把握しようとした。彼の宗教史的視座はキリスト教神学者としての立場から、東洋の宗教と西洋の宗教の類似性あるいは平行性へと向けられていた。その結果、彼はインド宗教の特徴をなす「多神教」的な側面を落ちこぼしてしまうことになった。

つまり、オットー宗教史学の核心には、エリアーデなどの宗教史学にも見受けられるように、近代西洋のキリスト教的世界観の根強い影響が見てとれる。オットー宗教史学の方法論的な再検討によって明らかになるのは、従来の宗教史学の「語り」を具体的な諸宗教的コンテキストへと引き戻しながら修正しなければならぬことである。現代の宗教学において、従来の宗教史の「語り」を修正しながら、それを再記述していくという宗教解釈学的な研究は、これまで以上にますます重要になっている。

ド・ブロスにおける

宗教起源と言語起源の問題

杉本隆司

Fétichisme 概念は、フランスの啓蒙思想家シャルル・ド・ブロス（一七〇九—一七七七）により創始された。彼は『フェティッシュ諸神の崇拜』（一七六〇）で、フェティズムを宗教の起源におき、ここから人類の宗教観念は歴史的に偶像崇拜を介して一神教（キリスト教）へと進歩したと主張した。一九世紀にこの概念はマルクスやフロイトに受け継がれ、現在の学術用語としての意味内容はこの一九世紀的文脈に規定されてきた。だがド・ブロスが生きた時代の数々の思想潮流にも深く規定された産物であったことはいうまでもない。

本報告ではその思想潮流の一つとして一八世紀に流行した言語起源論を取り上げた。ド・ブロスも『言語の機械的形成論』（一七六五）を著わした当時の思想モードの一翼を担う思想家だったからである。この書の刊行は『フェティッシュ神』の五年後であり、言語起源論への関心は宗教起源論よりも後にみえるが、実際は逆であり、彼の主題は言語起源論にあった。この報告では、彼の宗教起源論を言語起源論と突き合わせ、「フェティズム」概念の創始に言語起源論が担っていた影響を推察した。

まず『フェティッシュ神』の批判対象として、ド・ブロスが